

【連載】

## 『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

【第二十一回】日本の郵便制度を創設した

まえじま ひそか

前島 密



前島密 (1835-1919)

東京大学名誉教授 月尾嘉男

## 郵便制度の登場

チューダー王朝のイングランド国王ヘンリー八世は自身の書簡を遠方に送付するため一

五一六年に「ロイヤル・メール」を創設したが、それから一〇〇年以上が経過した一六三五年にチャールズ一世が一般の人々も利用できる郵便制度を整備した。しかし配達費用は大変に高価であったため富裕な人々しか利用

できない制度であったし、配達は襲撃される危険な仕事であり、配達する人間は拳銃を所持していたほどであった。

このイギリスで一八四〇年にローランド・ヒル (図1) という発明の才能がある教師が革命を実現した。配達料金を全国均一にし、代金は事前に購入した切手を貼付することによって支払うという現在にまで継続している郵便制度の発明である。そのために発行されたのが「ペニー・ブラック」という切手 (図



図1 ローランド・ヒル (1795-1879)

図2 ペニー・ブラック (1840)



という現代まで継承されている制度の導入である。

この郵便制度は急速に世界に浸透し、一八六五年に設立された世界最古の国際組織「国際電気通信連合」には出遅れたものの、一八七四年に「万国郵便連合」が発足した。その基本精神は「地球のすべての地域相互を固定料金で送付する」「国際郵便も国内郵便も同様に対処する」「国際郵便の料金は各国が徴

取し各国で使用する」であり、「万国郵便連合憲章」で規定している。この郵便制度を日本に導入した人物を今回は紹介する。

## 医学から国防に転換

その人物である前島密は一八三五（天保六）年に越後国頸城郡下池部村（現在の新潟県上越市）の豪農である上野助右衛門の次男として誕生した。幼名は房五郎である。しかし生後八ヶ月のときに父親が死亡したため、四歳になったときに母親とともに高田に移住し、糸魚川藩の藩医であった叔父の相沢文仲の家庭に世話になることになった。そこで毎日患者の診断や医薬の調合などを見聞し、医学を目指すことにした。

そのような経緯から、一二歳になった一八四七（弘化四）年に医学の勉強のため江戸に



図4 Ch. ウィリアムズ (1829-1910)

件（図3）が発生、前島は艦隊の隊員を接遇する浦賀奉行の井戸弘道に随行することになった。そこで医学よりも海防や国防が重要だと気付き、その方向を目指すことに転向した。その時期に、幕府の外国奉行で条約交渉を担当した岩瀬忠震や軍艦教授所の教授の竹内貞基などに会おう機会があり、幕府が東京築地に開所した軍艦操練所の生徒となる恩恵を享受した。これらの経歴から一八六二（文久

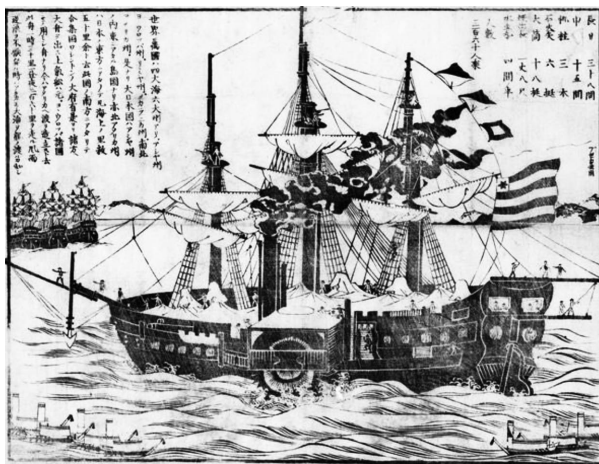


図3 黒船来航 (1853)

旅立ち、幕府の官医である添田玄齋や長尾全庵に師事し、医学の勉強をすることになる。ところが一八五三（嘉永六）年に浦賀にアメリカのペリー艦隊が来航するという驚愕の事



図5 G. フルベッキ (1830-98)

二）年に長崎に留学、明治時代になって立教大学を創設するチャニング・ウィリアムズ（図4）やアメリカから香港経由で来日して英語教師となるグイド・フルベッキ（図5）に英語を教授されるなどの機会があった。

## 明治政府に出仕

一八六五（慶応元）年になり、薩摩藩士

の鮫島誠造から同藩の開成所の英語教師になることを要請され赴任するが、一年で江戸に帰還し、一八六七（慶応三）年に幕臣の子弟に蘭学や英学を教育する「開成所（東京大学の源流）」の教授となる。しかし社会が開国の方向に急速に転換する気配になり、兵庫港（現在の神戸港）が外国へ開港するという情報を入手し、教授を退任して兵庫奉行の柴田剛中（たけなか）に懇願して奉行手付として勤務する。

しかし社会は急変しており、江戸幕府の第一五代將軍の徳川慶喜（よしのぶ）が大政奉還を朝廷に提出し、王政復古となつて兵庫奉行も消滅、徳川宗家（そうけ）も徳川家（いえ）達が第一六代当主となった。前島は家達に出仕し、江戸から静岡に移住してくる士族を救済する役目となり、住居の整備や授産施設の建設などを担当することになる。明治政府は大隈重信が中心となつて制度

らに今後の日本の長期の発展を考慮すれば、東北への発展が必須であるが、そのためにも江戸は大坂より有利な位置にあるという国土計画の視点からも江戸遷都を主張した。長期の視点で国家を構想していたのである。

## 官営の郵便制度の創設

このように活躍した前島だが、一般に有名なのは一円の普通切手の肖像になつてゐることである。切手のデザインは何年かで更新されるのが普通であるが、一円切手のみは一九五二年に前島密の肖像を採用して以来、七五年間ほぼ同一のデザインである（図6）。それは日本の郵便制度を創設したことへの敬意の表明である。郵便に関係して現在も使用されている「切手」「葉書」「手紙」「小包」「為替」「書留」などは前島が導入した言葉である。

改革を実行するため「改正掛（かいせいがかり）」が設置され、前島も出仕することになった。

前島は明治政府で様々な改革を推進するが、第一の仕事は江戸遷都である。当初は大坂への遷都（せんと）が有力であったが、前島は江戸への遷都を主張し、明治元年三月、太政官（だいじょうかん）であり大坂への遷都を主張していた大久保利通に「江戸遷都への献言」を提出した。その理由として大坂は商業の中心として発展しており衰退の心配がないが、二五〇年以上も日本を中心であった江戸の経済規模を維持するためには首都とする必要があるという意見である。

さらに開国して外国との交流が進展すれば江戸は既存の都市施設が充実しているし、都市が発展する背後の空間にも余裕があり、それによって日本の近世の発展の舞台であった都市を維持することも可能だと主張した。さ



図6 一円切手

この郵便制度の創設を支援したのは一八五九（安政六）年

から長崎で高杉晋作、大隈重信などに英語を指導したチャニング・ウィリアムズである。前島は一八六二（文久二）年に長崎でウィリアムズから英語を学習していたが「通信は国家にとって人間の血液のような存在で血管は脈通（みきどお）である」と説明され、実際に外国から切手を貼付して送付されてきた封書を紹介されていた。

そこで一八七〇（明治三）年に政府の民部

省駅通司の権正（次官相当）になった機会に郵便制度の創設を建議した。直後にイギリスに出張するが、留守の期間に後任の杉浦譲に継承し、一八七一（明治四）年三月一日（新暦の四月二〇日）に杉浦によって東京と大阪の区間で官営郵便事業が開始された。これが現在の郵便記念日の背景である。その初代駅通頭になったのは和歌山県広村で津波から村民を救済したことで有名な濱口梧陵である。

帰国した前島は郵便事業の官営に反対の濱口と意見が対立し、大隈重信などの判断で濱口が罷免され、前島が交替して駅通頭に就任するという事件になったが、前島は一八七七（明治一〇）年に駅通局長、七九（明治一二）年に駅通総監、八八（明治二二）年に通信次官に出世し、九一（明治二四）年まで在職した。日本の郵便制度の発祥か

ら社会に定着するまで郵便事業に関係したわけで、「日本近代郵便の父」の称号にふさわしい功績である。

前島は郵便事業を官営で普及させたことで有名であるが、それ以外にも様々な分野で業績があり、一八九一（明治二四）年に五六歳で通信次官を辞任して以後も多数の分野で活躍し、一九〇四（明治三七）年から一九一〇（明治四三）年まで貴族院議員として活躍した以外に、日本海員掖済会理事長、国語調査委員長などの公職、北越鉄道株式会社社長、日清生命保険社長など民間でも活躍し、一九一九（大正八）年に逝去した。

## 転換に直面している郵便

携帯電話、インターネット、衛星通信など電気通信技術の急速な普及により郵便は事業

として苦境にある。日本の郵便物数は二〇〇一年までは増加傾向にあったが、そこを頂点として減少に転換し、二〇二四年には最大時点の半分に減少しているし、投函する郵便ポストも二一世紀初頭の一八万六〇〇〇から最近では一七万四〇〇〇に減少している。その減少の影響もあり、郵便の送付費用も上昇している。

文書など書類を作成し、付近の郵便ポストまで出掛けて投函し、遠方によっては到着まで数日が必要という郵便は便利という視点からだけでは電気通信に凌駕されていくことは必然の趨勢である。しかし、表示装置のスクリーンに表示される無味乾燥な文字や図版と比較して、手紙による紙面には文章の内容以外の様々な情報が内在している。これを情緒と名付ければ、社会を円滑にする重要な手段である。

一九六〇年代の世界に旋風をもたらしたカナダの英文学者マーシャル・マクルーハンに「メディアはメッセージである」という有名な言葉がある。同じ言葉でも電話と手紙では相手に伝達される内容に差異があるという意味である。急速に電気通信が席卷していく社会にあって、前島の肖像の一円切手を使用しながら、電気通信ではない情報媒体（メディア）が伝達する内容（メッセージ）を再考することが必要な時代である。

つぎお よしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカン トリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叡智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。